

農林漁業体験に関するエビデンステーブル(研究結果の一覧)

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
1	Kida Haruyo、 et al. (2018)	北海道 札幌市	市内6つの幼稚園 の3-4歳の男女 335人(3歳300人、 4歳35人、男子176 人、女子159人)	横断研究	家庭でのトマト栽培の経 験(庭・プランターで子供 が毎日観察できる場所での 栽培)	トマトの嗜好 トマトを食べる習慣 食への興味・関心(5項目) ／質問紙調査	・家庭でトマト栽培の経験がある子 供はない子供と比べて、トマトを好 む者($p=0.001$)、トマトが食卓に出 た時に残さず食べる者($p<0.001$)、 食事の準備を手伝う者($p=0.043$)、 食事やおやつにトマトを希望する 者($p=0.004$)、が多い。	調整なし	未就学児 食教育 野菜 家庭菜園
2	木田 春 代、ら (2016)	北海道 札幌市	市内5幼稚園の年 少児221人(実施 群3園144人 非実 施群2園77人、3歳 198人 2歳23人、 男児118人 女児 103人)	前後比較デザイン・ 非ランダム化比較試 験／2012年5月-9 月、2013年3月にフォ ローアップ調査	ミニトマト栽培・収穫・試食 (園内の畑またはプラン ターにトマトもしくはミニト マトを植え、1回10分程 度の水やりや観察等の活 動を週3回以上行い、収 穫したトマトを幼稚園での おやつとして食べる)	偏食(食事に嫌いなも のが出た場合に食べ る)、トマトの嗜好、食 に関する興味関心(4 項目)／質問紙調査	・実施群の、偏食、トマトに関する 嗜好、食に関する興味関心(野菜 について知っていることを楽しそう に話す)が、実施前と比べて実施 後およびフォローアップ時で有意 に改善($p<0.05$)。食に関する興味 関心(食事を残したり落としたりし たときはもったいないと思う)は、栽 培前と比べてフォローアップ時に有 意に改善($p<0.05$)。非実施群では いずれも有意な変化はなかった。 ・フォローアップ時において実施群 が非実施群よりも偏食を改善した 者の割合が有意に高かった ($p<0.036$)。	調整なし	未就学児 野菜栽培 縦断研究 偏食
3	菅野 靖 子、ら (2011)	新潟県 新潟市	幼稚園4歳児38 人、その保護者25 人	前後比較デザイン／ 2010年5月-7月	野菜栽培体験(プランター でなすの栽培、収穫、調 理、摂取)	①給食の野菜摂取量: なすの副菜2品、なす 以外の副菜2品／残食 量調査 ②家庭でなす料理が 出た時の摂取状況／ 質問紙調査	①なすの味噌炒め($p=0.001$)、カ レー炒め(<0.001)の摂取量は事前 に比べ事後で有意に多かった。なす 以外の副菜は、事前のひじき煮と 事後のおきざみ昆布の炒め煮では 事後の摂取量が有意に多かった ($p<0.001$)。 ②家庭で「なす」料理が出された ときに「食べる」割合は、事前と事後 で有意差なし($p=0.525$)。	調整なし	幼稚園の4 歳児 単独の野 菜栽培体 験 野菜摂取 給食 前後比較デ ザイン

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
4	英 格、ら (2014)	福岡県	T町(農村部)の農 業体験を実施した 小学3年生64人、 体験学習なしの小 学3年生52人	前後比較デザイン・ 横断研究/2012年9 月-2013年3月	野菜作り体験授業の実施 (種まきから加工食品(味 噌や漬物)を作るまでの 一連の作業)	食習慣(8項目:肯定的 回答の得点が高くなる よう配点)/質問紙調 査	・体験前と比較して体験後で、「食 事について好き嫌いが無い ($p<0.05$)」「いつも野菜を多めに食 べたい($p<0.001$)」と回答した者が 有意に増加. ・体験学習のない小学3年生と比 較して体験学習をした小学3年生 では、「食事について好き嫌いがな い($p<0.05$)」「いつも野菜を多めに 食べたい($p<0.001$)」と回答した者 が有意に多い.	調整なし	環境教育 農業体験 質問紙調 査 比較研究
5	谷口 貴 穂、ら (2010)	福島県 埼玉県	小学5年生、361人 男子(福島県A市 57人、埼玉県B市 120人)、女子(福 島県A市63人、埼 玉県B市121人)	横断研究	主観的農作業体験(「学 校の授業やクラブ活動で 農作業をしたことがある」 の質問に対し「まったく ない(1点)」-「かなりある (4点)」で回答)	食に対する感謝の気 持ち・地場産物に対す る態度/質問紙調査	・全体では、主観的農作業体験と 食に対する感謝の気持ち ($p<0.05$)、地場産物に対する態度 ($p<0.01$)、との有意な正の相関あ り. ・県別では、食に対する感謝の気 持ちとの有意な正の相関なし.地場 産物に対する態度との有意な正の 相関あり(両県とも $p<0.01$).	調整なし	子供 農業 地域差 認知的要 因
6	谷口 貴 穂、ら (2010)	東京都	A区の公立小学校 (20校)に通う小学 5・6年生1994人 (性別:男子998人 女子975人 無回 答12人、学年:5年 生980人 6年生 1014人)	横断研究	学校菜園活動(「野菜・果 物や米を学校の授業で育 てたことがある」)に対し 「やったことがない(1点)」 -「とてもよくやった(4 点)」で回答)	食べ残し行動得点(3 項目の合計)/質問紙 調査	学校菜園活動と食べ残し行動得点 との有意な正の関連あり(全体 $p=0.005$ 男子 $p=0.035$ 女子 $p=0.005$)	嗜好 もつたいないと 思う気持ち 結果期待 家庭のしつけ	児童 食べ残し もつたいな いと思う気 持ち 野菜摂取
7	赤松 利 恵、ら (2009)	東京都	K区の公立小学校 (20校)に通う小学 5・6年生1994人 (性別:男子998人 学年:5年生980人 6年生1014人)	横断研究	栽培活動の経験(「野菜・ 果物や米を学校の授業で 育てたことがあるか」)につ いて「やったことがない」 ~「とてもよくやった」の4 段階で回答)	「食に対する感謝の気 持ち」尺度得点/質問 紙調査	栽培活動の経験に「とてもよくやっ た」と回答した者はそれ以外の者と 比べて、有意に「食に対する感謝 の気持ち」尺度得点が高い ($p<0.001$).	調整なし	尺度 児童 態度 食物 学校保健

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
8	大浦 裕 二、ら (2009)	群馬県	4つの小学校の 5-6年生、524人	横断研究	(1)食農教育モデル校 指定の有無 (2)家庭の取り組み (家庭菜園・旅先での 農業体験の経験の有 無)	①食知識(3項目:給食 での地元野菜の利 用、サツマイモ収穫時 期、おきりこみ(郷土 料理)) ②食に関する行動(1 項目:家族との買い 物) /質問紙調査	・食農教育モデル校指定ありの児 童で「給食で地元野菜を利用して いることを知っている」者が多く ($p=0.01$)、「サツマイモの収穫時 期」を正解した者多い($p=0.02$). ・家庭菜園の経験がある児童は家 庭菜園の経験がない児童よりも、 「給食で地元野菜を利用しているこ とを知っている」者($p<0.01$)、「おき りこみ(郷土料理)を知っている」者 ($p<0.01$)、が多い. ・農業体験を経験した児童は農業 体験を経験していない児童より、 「おきりこみを知っている」者 ($p=0.02$)、「家族と食料品の買い 物に行く」者($p<0.01$)、が多い.	調整なし	
9	山田 伊澄 (2008)	長野県 飯山市 (東京都 武蔵野 市)	武蔵野市I小学校 5年生41人(男子 19人、女子22人)	前後比較デザイン /2006年9月	セカンドスクール(授業の 一部としての農山漁村で の体験学習)の実施	気分プロフィールテス ト(子ども版POMS)/質 問紙調査	農業・農村体験の「1週間前」と「直 後」で、子どもの「緊張-不安」が有 意に緩和された($p<0.05$).「怒り-敵 意」「活気」「疲労」では、有意差な し.	調整なし	
10	Yoshida Takako、 et al.(2007)	静岡県 浜松市	隣接する2つの 小学校の小学1 年生130人(A校 67人、B校63人)	非ランダム化比較試 験/2000年-2002年	A校(介入群)の食育プ ログラム(1年生時4月 ~3年生時4月まで) ①料理の選択(バラン スのとれた食事選択) ②味覚に関する議論 (①で選択した料理に 関する質疑応答) ③調理体験(食事と食 材の関係を学ぶ) ④農業体験(食材の成 長過程を理解する:1年生 で40時間、2年生で45時 間) ⑤便の観察	味覚感受性 「甘い」「塩辛い」「酸っ ぱい」「苦い」「4つの味 覚の合計」/味覚検査 用試薬	A校(介入群)とB校(対照群)で介 入の前後の味覚の変化について 比較すると、A校の児童において 酸味($p<0.05$)、苦み($p<0.05$)、味覚 の合計($P<0.05$)、で感受性が有意 に上昇.	調整なし	農業体験 味覚 小学生 介入研究

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
11	山本徳司 (2008)	北海道 新潟県	北海道及び新潟 県在住の小学校3 年生～中学校1年 生447名	前後比較デザイン	農業・農村体験(田植え体 験、稲刈り体験、生物調 査、森林散策、植物調 査、環境調査)	PEMEC(体験学習に特 化した心理評価法)/質 問紙調査	・全体では介入後、怒り($p<0.01$)と 不安($p<0.01$)が低下、疲労が増加。 ・田植え体験では介入後、怒りと不 安が低下する傾向。 ・稲刈り体験では介入後、怒りと 不安が低下する傾向。田植え体験 と比較してみると、疲労に関しては 体験後に上昇する傾向が強い。 ・年齢別では、年齢が高くなるにつ れて怒り・不安の低下が顕著。疲労 は小学生で増加。 ・男女で有意差はない。	調整なし	教育的機 能 意識変化 保健休養 機能 POMS 農村体験 学習
12	島村光治 ら(2013)	愛知県 名古屋市	中学校2年生449 名、対照群中学校 2年生150名	非ランダム化比較試 験/2008～2010年	ギネマム一人一鉢栽培	味覚・食に対する興味 /質問紙調査	介入前の味覚・食に対する興味に 有意差はなかったが、介入後では 対照群と比べて介入群で有意に味 覚・食に対する興味が高い(p <0.05)。	調整なし	ギネマム ミラクルフ ルーツ 味覚教育 食教育 味覚
13	佐藤 公子 (2015)		大学生(看護系 大学)5学部1-4 年生、590人	横断研究	小学校から高校における 農業体験学習(野菜・米 の栽培、果物の収穫、田 んぼや畑の貸与)の有無	①食習慣7項目、②食 知識3項目(否定的回 答の得点が高くなるよ う配点)/質問紙調査	体験なしと比較して体験ありで、① 食習慣では、「夕食には主食・主 菜・副菜のそろった食事を食べる ($p=0.048$)」、「大学に畑・田んぼが あれば収穫などの作業に参加して みたい($p=0.009$)」、②食知識では 「旬の野菜について知っている ($p=0.007$)」、「地産地消という言葉 を知っている($p=0.013$)」、「青、赤、 緑、黄色の四群点数表を知ってい る($p=0.015$)」、の得点が有意に低 い。	調整なし	農業体験 食生活 大学生
14	土橋 豊 (2010)	兵庫県 西宮市	短大の幼児教育 保育学科2回生 (24人、すべて女 子、年齢19～20 歳)	前後比較デザイン/ 2005年4月-7月	野菜播種(カボチャ、トマ ト、ポップコーン)	血圧、脈拍数/自動 式電子血圧計	拡張期血圧が有意に上昇 ($p<0.05$)、脈拍数が有意に低下 ($p<0.01$)した。収縮期血圧に有意な 変化はなかった。	調整なし	園芸福祉 園芸活動 の内容 園芸療法 学校園芸

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
15	大竹 正 枝、ら (2010)	北海道	大学生9人(平均 年齢23.0±2.5歳、 男性6人、女性3 人)	前後比較デザイン/ 2007年7月-9月	園芸作業(除草、耕起、ミ ズナの播種)	①副交感神経活動/ 心拍変動 ②気分プロフィール検 査(日本語版POMS) ／質問紙調査 ③快情感・リラックス感 (MCL-S.1)/質問紙調 査	①いずれの作業でも作業中は低い 水準で推移した.除草と耕起では作 業後時間をかけて作業前の水準 に戻った(増加した).播種では作業 後すぐに増加し、作業前より高い 水準になった. ②播種前後で疲労得点($p=0.026$) と総合得点($p=0.026$)が有意に低 下.除草と耕起では有意な変化な し. ③除草($p=0.05$)と播種($p=0.05$)で は快情感が有意に増加.耕起では 有意な変化なし.除草($p=0.05$)と耕 起($p=0.05$)ではリラックス感が有 意に低下.播種では変化なし.	調整なし	園芸活動 副交感神 経活動 運動強度 MCL-S.1 POMS
16	Soga Masashi、 et al. (2017)	東京都 練馬区	練馬区内の市民 農園利用者165人 (平均年齢61.9 歳)、市民農園を 利用していない練 馬区民167人(平 均年齢61.0歳)	横断研究	市民農園の利用	①飲酒頻度、②野菜 摂取頻度、③身体活 動頻度、④主観的健康観、⑤健康の自覚 症状(スコアが低いほどよい)、⑥BMI、⑦精 神的健康(GHQ12:ス コアが低いほどよい)、 ⑧社会的凝集性/質 問紙調査	市民農園の利用と、①飲酒頻度と の有意な正の関連($p=0.04$)、②野 菜摂取頻度との有意な正の関連 ($p<0.001$)、④主観的健康観との 有意な正の関連($p<0.001$)、⑤健 康の自覚症状との有意な負の関 連($p<0.05$)、⑦精神的健康との有 意な負の関連($p<0.05$)、⑧社会的 凝集性との有意な正の関連 ($p<0.001$)、が見られた.③身体活 動頻度、⑥BMI、との有意な関連 はなかった.	①②③:調整 なし ④⑤⑥⑦⑧: 性、年齢、家 計収入、就労 状況、喫煙頻 度、飲酒頻 度、野菜摂取 頻度、身体活 動頻度	農業 地域の健 康 生態系サー ビス 経験の消 失 グリーンイ ンフラストラ クチャー ヘルスプロ モーション 自然体験 都市緑地 都市化 ウェルビー イング

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入 期間	農林漁業体験の実施方 法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関す る調査項目/評価方 法)	結果 利点、重要性に関する 調査結果(関連)	共変量の調整	キーワード
17	町田 大 輔、ら (2017)	群馬県	A市内3町にある 市民農園の利用 者30人(50-74歳 の男性)、同町の 市民農園を利用し ていない50-74歳 の男性(市民農園 以外で野菜・果物 栽培をしている91 人※農家を含む、 野菜・果物栽培を していない130人)	横断研究	市民農園の利用	①BMI、②主観的健康 観、③野菜・果物摂取 状況、④身体活動、⑤ 座位時間、⑥社会的 凝集性/質問紙調査	・市民農園利用者では、野菜・果物 栽培を行っていない者と比較して、 ④身体活動量が多い者のオッズ比 が3.00(1.18-7.64)、⑤座位時間が 短い者のオッズ比は0.46(0.20- 1.06)①BMI、②主観的健康観、③ 野菜・果物摂取状況、⑥社会的凝 集性、では有意差なし。	②③:調整な し ④⑤:年齢 ⑥:学歴	市民農園 野菜・果物 栽培活動 野菜果物 摂取回数 身体活動 量 健康
18	雨宮 護、 ら(2012)	千葉県 柏市	20-79歳の柏市民 1612人	横断研究	実施している農作物栽培 活動の種類数(家の庭や プランタでの野菜づくり、 貸し農園での野菜づくり、 空き地での野菜づくり、の うちいくつ実施しているか (0-3))	野菜入手機会、食品 摂取頻度(食品摂取の 多様性得点)/質問紙 調査	実施している農作物栽培活動の種 類数と野菜入手機会($p=0.01$ 、種 類数が多いと野菜入手の機会得 点が高い傾向)・食品摂取頻度 ($p<0.01$ 、種類数が多いと食品摂 取の多様性得点が高い傾向)、と の有意な関連あり。	調整なし	フードデ ザート 農作物栽 培活動 都市住民 食生活 構造方程 式モデリン グ
19	野田 知子 (2007)	東京都 練馬区	体験農園利用者 295人、市区民農 園利用者182人、 非農園利用者168 人(男性346人、女 性299人)	横断研究	農業体験農園(栽培指導 あり)の利用、市区民農園 (栽培指導なし)の利用	食意識(21項目)/質 問紙調査または面接 調査	農業体験利用者および市区民農 園利用者は非農園利用者と比べ て、ほとんどの項目で食意識が高 い(20/21項目)。農業体験利用者と 市区民農園利用者との差が見られ た項目もある。	調整なし	